

令和8（2026）年1月

日本シェリー研究センター会員各位

日本シェリー研究センター第34回大会開催のお知らせ

年始の華やぎも次第に落ち着き、澄んだ冬空のもと街が日常の表情を取り戻す頃となりましたが、会員の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのことと拝察いたします。

皆様の変わらぬご厚情に支えられ、本年も日本シェリー研究センター全国大会を開催する運びとなりました。日時は3月14日（土）12時30分より、例年どおり帝京大学霞ヶ関キャンパスにて開催いたします。

今大会は、新たにご入会いただいた若手研究者による、ワーズワスを主題とする清新な研究発表をもって開幕いたします。続いて、ヴィクトリア朝詩をご専門とされる優れた研究者をお招きしたシンポジウムが開催され、十九世紀後半のイギリス詩人への P. B. シェリーの詩的影響を主題とする三つの発表が予定されております。なお、大会を締めくくる特別講演では、阿部美春先生（立命館大学）をお迎えし、メアリ・シェリーと死後の生についてご講演いただきます。

大会の開催形式につきましては、例年どおり対面とオンラインによるハイブリッド（ハイフレックス）を予定しております。昨年同様、対面・オンラインを問わず多くの会員の皆様にご参加いただけますことを期待しております。

末筆ながら、会員の皆様におかれましては、午年にふさわしく、躍動と進展に恵まれた一年となりますことを心よりお祈り申し上げます。

日本シェリー研究センター会長

木谷 巖

オンライン (Zoom) 参加を希望される方へ (会員外)

会員外の方で、オンライン (Zoom) にて大会への参加を希望される場合は、2026年2月21日 (土) までに事務局・池田宛に e-mail (dotsnear@yahoo.co.jp) にてご連絡ください。その際、件名は「26年度大会参加希望」とし、お名前とご所属をお知らせくださるようお願いいたします。頂いたメールに返信の形で、Zoom ミーティング情報の詳細 (URL、ミーティング ID 番号、パスコード) を2月末日までに送付いたします。2月末日までにお手元に届かない場合は、申し訳ありませんが、上記、池田宛にお知らせください。

なお、会員には、もれなく、Zoom ミーティング情報の詳細を大会前にお知らせする予定です。

事務局からのご案内

1. 出欠確認について

2月21日（土）までに、大会への出欠と出席方法（対面 or オンライン）、および懇親会出欠を Google フォーム (<https://forms.gle/YEEyCsQeiE2KwTiK6>) にてお知らせください。

2. 会費について

大会会場では会費の支払いを受け付けておりません。6月にお送りした振込用紙をご利用いただくか、下記の振込先へお振込みください。よろしく願いいたします。

振込先：ゆうちょ銀行 00190-0-661999 日本シェリー研究センター

3. 参加費について

参加費（会場費）は無料です。お気軽にご来場ください。

4. 懇親会について

会場：帝京大学霞ヶ関キャンパス内ラウンジ（立食形式の予定）

会費：4,000円（学生会員は2,500円）

アットホームなパーティを企画しております。

会員内外を問わず、皆様のご参加をお待ちしています。

帝京大学 霞ヶ関キャンパス ご案内

大会会場：帝京大学霞ヶ関キャンパス

〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-16-1 平河町森タワー9階

土曜日はビルの玄関が施錠されております。ドアの内側でアルバイト学生が待機しておりますので、ご入場の際は声をお掛けください。

●永田町駅下車

東京メトロ有楽町線、半蔵門線、南北線「永田町駅」より徒歩約1分（4番出口）

●赤坂見附駅下車

東京メトロ銀座線、丸ノ内線「赤坂見附駅」より徒歩約6分（7番出口）



日本シェリー研究センター第34回大会

日時： 2026年3月14日（土） 12:30より受付開始

場所： 帝京大学 霞ヶ関キャンパス（平河町森タワービル9階）

1. 12:40 開会の辞 会長 木谷 巖

2. 12:45～13:15 研究発表

ワーズワスの“The Brothers”における「墓碑銘」の両義性

発表者 菅谷 菜々美

司会 笠原 順路

3. 13:30～15:30 シンポジウム

19世紀後半におけるシェリー受容とヴィクトリア朝の詩学（1850-1890）

司会／コーディネーター 木谷 巖

・ 「長いロマン主義」の連続と断絶——韻律、フィロロジー、二重詩

パネリスト 松村 伸一

・ ヴィクトリア朝後期におけるシェリーのカノン化に J. A. シモンズが果たした役割

パネリスト 木谷 巖

・ 19世紀後期のシェリー読み直し、あるいは読みかえ——Poetics & Politics

パネリスト 関 良子

4. 15:45～16:45 特別講演

メアリ・シェリーの死後肖像は何を語っているのか

発表者 阿部 美春

司会 池田 景子

5. 16:50 年次総会

昨年度分会計報告・役員改選・その他

研究発表

ワーズワスの“*The Brothers*”における「墓碑銘」の両義性

菅谷 菜々美

本発表は、William Wordsworth の“*The Brothers*” (1800) の物語を、18世紀イギリスにおける墓碑銘文化の文脈から再検討することを目的とする。先行研究において、本作品は、産業革命以降の都市化を背景に崩れゆく村落共同体、また故郷喪失の物語として解釈されてきた。しかし、語りを中心は教会墓地を訪れたレナードと司祭との対話にあり、レナードの夭折した弟ジェイムズの生涯について語る司祭が実質的に「墓碑銘」的役割を担っていることは注目に値する。

本発表では、のちに書かれた“*Essays upon Epitaphs*” (1810) を踏まえ、このワーズワス作品における口承の「墓碑銘」を考察する。具体的には、レナードが故郷へ帰還しない結末に着目し、ワーズワスが描く墓碑銘が社会的連帯を強固にする装置であると同時に、共同体への帰属を促さない両義的な媒体でもあった可能性を検証してみたい。

(すがや・ななみ 日本女子大学大学院生)

19世紀後半におけるシェリー受容と ヴィクトリア朝の詩学（1850–1890）

本シンポジウムでは、登壇者である松村伸一氏（青山学院大学）、関良子氏（三重大学）、木谷巖（帝京大学）の三者が、19世紀後半においてシェリーの詩がヴィクトリア朝の詩人および文人にいかなる文学的影響をもたらしたのか、その軌跡を辿る。むろん、このテーマにおいて先行する研究者としては、Graham Hough、Harold Bloom、Richard Cronin、あるいは Michael O'Neill など枚挙にいとまがないため、対象とする時代を1850年から1890年までに設定し、扱う詩人作家も発表者ごとに限定する。また、登壇者それぞれの議論を縦糸とみなすとするれば、その横糸として Tom Mole の *What the Victorians Made of Romanticism* (2017) を共通の参照テキストとする。そのうえで、まずは松村氏が19世紀後半におけるヴィクトリア朝の（とりわけブラウニングとロセッティの）詩学のありようをシェリーとの関係のなかで浮かび上がらせ、それを受けて木谷が、1870年代以降におけるシェリーのカノン形成が後期ヴィクトリア朝にもたらした詩学的影響について論じ、最後に関氏が1880年代におけるシェリーの再評価にシェリー協会が果たした役割について考察する。

「長いロマン主義」の連続と断絶 ——韻律、フィロロジー、二重詩

松村 伸一

ロマン派詩学やモダニズム詩学と比肩しうるような、ヴィクトリア朝詩独自の詩学と呼べるものがあるかどうか。これは多少なりともヴィクトリア朝の詩を齧る者にとって一種呪いめいた問題意識と言えるだろう。ここでは前後の時代との連続性と断絶に接近する手がかりとして、「長いロマン主義」の間に進んだ philology と韻律論の展開について振り返るとともに、Isobel Armstrong の提唱した double poem の概念を紹介する一方、ロバート・ブラウニングやダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの伝記的事実と作品テキストから、彼らとロマン派詩、特にシェリーとの複雑な関係について考えてみる機会としたい。

（まつむら・しんいち 青山学院大学）

ヴィクトリア朝後期におけるシェリーのカノン化に

J. A. シモンズが果たした役割

木谷 巖

本発表は、Tom Mole (2017) による Stopford Brooke のシェリー受容、とりわけキリスト教との融和をめぐる議論を参考に、メアリによるシェリー詩集 (1824 年版、および 1839 年版) の出版以降に起きた、ヴィクトリア朝におけるシェリーの正典化、いわゆるカノン形成から議論を始める。とりわけ、J. A. シモンズによる伝記 *Shelley* (1878) が “English Men of Letters” シリーズの第一弾となった事実——ヴィクトリア朝におけるシェリーのカノン化において決定的な出来事——に着目しつつ、the Uranian poets にも連なるシモンズが感知したシェリーの詩的特徴について紹介する。これをもとに、アーノルドによる有名な “ineffectual angel” 像を読み直し (アーノルドがシェリーの詩的な美しさを否定していた訳ではなかった点も踏まえ)、シェリーの詩がもたらす靈妙な美が、ヴィクトリア時代をつうじて色褪せることなく、のちに若き日のイエイツや T. S. エリオットをはじめ、いわば「シェリーの熱」にあてられた青少年を生み出していったその秘密の一端に触れることを試みる。

(きたに・いつき 帝京大学)

19 世紀後期のシェリー読み直し、あるいは読みかえ

——Poetics & Politics

関 良子

Tom Mole (2017) は、19 世紀全体を通して神学の文脈で読み直されたシェリーは、無神論を説くことでむしろキリスト教の伝道者になったと考えられたと分析している。そして 1880 年までにはシェリーがリベラルな神学の発展に重要な役割を果たしたと見なされるようになったと述べている。本発表では Mole の研究を応用し、1880 年前後に様々な分野でシェリーの読み直し、あるいは自由な読みかえが起こった事象に注目する。重要な役割を果たしたのが 1885 年 12 月に設立されたシェリー協会である。協会が実施した月に一度の講演を概観すると、神学だけでなく、社会主義運動、菜食主義など様々な側面からシェリーの読み直しが行われていたことが分かる。本発表ではバーナード・ショーやエレナー・マルクスの講演に注目し、ショーが “the Chartists’ Bible” と呼んだ *Queen Mab* への評価を中心に考えていく。

(せき・よしこ 三重大学)

特別講演

メアリ・シェリーの死後肖像は何を語っているのか

阿部 美春

メアリ・シェリーの確定的肖像画は二作のみだが、二つの肖像のイメージはあまりにも異なっている。顔立ちこそ同じだが、印象は別人のようである。一つは、友人画家リチャード・ロスウェルが描いたものである(c.1840)。画家が描き始めたのは1831年、当時メアリ33歳。画家のイタリア遊学で中断の後、再び着手された絵が完成しアカデミーで展示されたのは1840年、時にメアリ43歳。この肖像は現代、メアリ関連文献の表紙や口絵を飾り、われわれ読者にもなじみ深い。余分なものを省いた暗い背景と黒ビロードのドレスは、見る者をモデルの顔に集中させ、とりわけ、意志の強さを秘めた両親譲りの眼差しへと誘う。展示の際には『イスラムの反乱』の献辞「メアりに」第七連が添えられた。友人画家の手になる肖像は、第七連のメアリと同時に、シェリーが「メアりに」を献じた時代にはなかった憂いと、穏やかな風貌の中に母親譲りの堅忍不拔の意志が静かに息づいていることを感じさせる。

もう一つの肖像は、メアリ死後、レジナルド・イーストンがデスマスクを元に、ロスウェウルの肖像を参考に描いたものである(1857)。金茶のマントーリャを纏った姿は、おしゃれで華やかな印象を与えると同時に、時代の求める服装規範に忠実であることを窺わせる。しかし生前の肖像で印象的な、まっすぐに見る人に向けられた、穏やかながら秘められた意志の強さを感じさせる眼差しはない。その目は何も語らず、焦点を結ぶこともない。

肖像の依頼主は息子夫婦である。息子夫婦、とりわけレディ・シェリーは、「彼女のお陰でロマン派のどの詩人も及ばないほどの伝説が早くに形成された」と言われるほど、義父母のスキャンダラスなイメージを修正し、「正しい」姿を世に伝えようと奔走した。肖像制作もその一つであった。イーストンの肖像画以外に、1851年ウィークスにメアリの墓地彫像制作を、1890年フォードにシェリーの墓地彫像制作を依頼している。肖像は、見る者の想像を喚起し、視覚イメージを脳裡に刻むという点で、時に文字による伝記以上に雄弁である。遺族はこれらの死後肖像に何を語らせようとしたのだろうか。義母思いのレディ・シェリーは、『信頼できる資料に基づくシェリー回想記』(1851)の編集出版を主導したのだが、そこでは、メアリの過酷な人生をやや強調し過ぎるきらいはあるものの、「運命に果敢に立ち向かう」姿を描いている。しかし死後肖像にとどめようとした姿は異なっている。

ここでは作家の死と神話形成という観点から、死後肖像のメアリが何を語っているのか、言

い換えるならば、遺族は死後肖像に何を語らせようとしたのか検討してみたい。合わせて、遺族の依頼ではないが、メアリ死後、同時代の画家たちが描いた二つの肖像、フリースの「恋人たち」(1876)とフルニエの「シェリーの火葬」(1889)に描かれたメアリの姿は何を語っているのか検討してみたい。

(あべ・みはる 立命館大学)